



日本リスク研究学会は、日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として、1988年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体であるSRA(The Society for Risk Analysis)のJapan sectionとして発足しました。現在では、米国、欧州、東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. リスク放談(第1回)

この「リスク放談」のコーナーでは、著名な先生方のリスク研究に関する想いやご意見を紹介致します。

日本のリスク研究は何処へ行く？

京都大学名誉教授 菅原 努

私はこの学会設立のときからの会員です。しかし学会運営に熱心に参加したことはありません。多分その意味で、半ば内、半ば外と言った立場で放言を聞かせてくれ、と言うのが広報誌担当の近本氏の御依頼ではないかと勝手に想像しました。

まずこの放談を書く前に余り勝手なことを書いては申し訳ないので、過去10年の学会誌を目次と巻頭言を通して概観しました。まず、学会名のリスク研究というのは英語の Risk Analysis の意識でないかと思いますが、少なくともアメリカで起こった学問の輸入から始まったことは間違いないでしょう。学会の内容も大体そんなところと判断しました。でも何時までも輸入学問では仕方ありません。さすがに巻頭言には日本の独自性、少なくとも今の社会の問題を考えたリスク研究を示唆しているものが幾つか見られ、少し安心しました。例えば「木下富雄：リスクの分野は社会心理学の宝の山、11(1)」, 池田正之：リスク対策の地域性と国際性、12(1), 土田昭司：リスク研究に新しい流れはあるか？：リスク研究としての便益性分析、15(2)などです。

でも世の中はもっと早く動いているのではないか、というのが私の感想です。まず私の専門の放射線の分野ですが、この何年か国際放射線防護委員会が1990年勧告について新しい勧告を出すかどうか、其の中身はどうするか、と言ったことを巡って世界中で大きな議論になっていました。私はこの国際勧告を戦後の1950年以来注目してきました。初めこれ以下なら障害は見られないという立場から許容線量と言はれたのが、遺伝的障害が問題になりだしてから、どんなに少なくとも線量に比例して障害があるとされるようになり、線引きが難しくなりました。(2ページに続く)

<目次>

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. リスク放談(菅原 努)2. From the President 会長からのメッセージ
(土田昭司)3. 第19回秋期研究発表会(つくば, 2006年11月)
実行委員長所感(東海明宏)
学会受賞講演(間正理恵)
広報委員所感(中谷内一也) | <ol style="list-style-type: none">4. 米国SRAの訪問記(関澤 純)5. 事務局だより6. その他(2007年第20回秋期研究発表会開催案内)7. 編集後記(近本一彦) |
|---|---|

(1 ページからの続き) さらにがんが障害に加えられるようになるのがんの突然変異説から、しきい値なしの直線説 (LNT 説) が主流になり、ますます難しくなりました。そこへこのリスクという概念が持ち込まれそれを他の社会のリスクと比較するというので、ある許容レベルというのが決められることが分かりました。放射線防護ではこれに基づく防護勧告が1977年に出されました。私はこの考えに感心し、それを学生との輪読の資料に使い、この考えを広めようと努力したのです。其の考えはリスクを見直すと共に、今度はリスクの相互比較ではなく総合的判断と言う形で1990年勧告にも適用されています。

ところが2000年頃から、この勧告を見直す動きが始まり、今に続いています。そこでは、初めはリスクコミュニケーションを円滑に行なう為にできるだけ関係者も参加して検討することが強調されていました。ところが最近の改定案ではリスクを中心とする議論から段々とはなれ、人々が受け入れている自然環境での線量を基準に、その何倍ということで線引きに対することで理解をすすめようとしているようです。ゼロリスクはあり得ないと分っているが、「いまさらいらぬリスクの元を持ち込まれるのは困る」、「やはり放射線が怖い」と言ったリスク論の問題を避けようとしているのではないかと疑われます。私達はもう30年にわたってリスク、リスクと言いつけてきたのですが、少なくとも放射線についてはそのリスクの意味が未だにまともに理解されたとは思えません。狂牛病対策も、表向きはリスクアナリシスでやると言いながら、実際は「何となく安心論法」で国民を納得させたのではないのでしょうか。一体リスク研究学会は何の役を果たしたのでしょうか。

さて次はこの安心です。いまや首相の施政方針演説から、地域の広報誌まで「安心・安全の国づくり」、「安心・安全なまち」と言った言葉であふれています。勿論新聞にも盛んに出てきます。この大本はどうやら1998年の科学技術会議のワーキング・グループ (W・G) にあるようです。そのW・Gでは「科学技術創造立国とは一体何か」が議論され、その目標の一つとして「安心・安全で快適な生活ができる国」というのが決められたのです。当然この安心・安全という言葉については、議論があったようです。しかし、最後に「安心・安全」というのは日本語では大変語呂が良いので、採用したと言う事ようです (井村裕夫: 21世紀を支える科学と教育, p. 75-76, 日本経済新聞社 2005)。その後、総合科学技術会議でも特別委員会を設けてこの問題を議論し報告書(「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書, 2004年4月)が出ていますが、そこには「安心・安全」とまとめた言葉の定義はありません。定義の明確でないスローガンは政治家向けかも知れませんが、安全やリスクを学問として論じるべき学会としては困ったことです。現に日本リスク研究学会編のリスク学辞典ではその改訂増補版では「リスク対応の新潮流」という章をつくりそこで、「14. 安全と安心の心裡と社会」という項をつくって解説しています。しかし、その初めに、「安全と安心」はリスクコミュニケーション、リスク認知における概念である、とありますが、これが既に問題です。この学問はアメリカからの移入品ですが、安全は **Safety** として英語がありますが、安心には対応する英語はなく、ここではローマ字で **Anshin** と書かれています。**Risk Analysis** にとって安心は「リスクがないと安心する」ことになり、リスクを認めた上でそれをどう取り扱うかというリスク論の考えとは相容れません (菅原 努; 安全のためのリスク学入門, p. 176-180, 昭和堂, 2005)。安心して多くの方が使ってきた暖房器具が実は安全な物でなかったという報道が新聞紙上を賑わしています。今になってメーカーはあれは換気に注意して使ってもらった必要があったのだ、と説明しています。

もう二年前のことになりますが、スマトラ沖大地震に関して新聞に次のような記事がありました。ある新聞の「警鐘: 巨大地震の時代」という特集です。その見出しを追ってみます。

第1面: 津波対策: 「まず逃げる」浸透せず。第2面: 集落丸呑みする津波 死を防ぐのは「恐怖」
そうです。安心と安全ではなく、安全は恐怖 (不安) によって初めて確保できるのです。

アメリカで分析を元にして成長してきたリスク研究を、そのまま我が国で進めるなら、其の適応を規定するなり限定する努力が必要だと思えます。むしろ何人かの方が提唱されているように我が国の目指している安心・安全は学問の対象にどうしたらなるか、もっと皆で智慧を絞るべきではないでしょうか。これについて中谷内一也がリスク研究の枠内でこの問題を理解するためのモデルを提出しています（中谷内一也：リスクのものさしー安全・安心生活はありうるか NHKブックス、2006年6月）。少し彼の本から引用します。

「安全・安心生活はありうるか」、いいかえれば（リスク情報によって）安全・安心生活を築くことはできるか。私の回答は、できない、となる。リスク情報は将来の安全を高めるのに貢献するが、現時点の不安を高めるものである。（中略）かといって、いたずらに不安をあおって行為を誘導するのがよい情報の送り手とは思わないし、相矛盾する不安喚起情報に踊らされて右往左往することが情報の受け手にとって有益であるとも思えない。（中略）このような傾向を軽減する為に本書で提案したのが、受け手の努力を軽減しながら定量的なリスク情報処理を可能にするために、送り手が標準化されたモノサシつきでリスク情報を提供することである。（p. 241-242）

でも、このモノサシは果たして日本人に受け容れられるのでしょうか。例えば、狂牛病の場合もいろいろと細かいリスク評価はしたが、それをそのまま示して自動車事故死よりも少ないと言って日本人の反発をかったのは、アメリカの高官でした。それに対して我が国では安全委員会が定量的リスクをそのまま示しても国民は納得しないだろうと考えて、あえて漠然と全頭検査と同様にリスクは小さいと言ったのだ、とすれば、それも一つのやり方かも知れません。中谷内氏に言わすれば、それも一つのモノサシだと言うかもしれません。

私はもう少し突っ込んで、「安心・安全」も、我が国の人びとの心理として、特別な形で潜在しているだろうと考えて、それを探り出すことを試みることにこそ一つの新しい課題ではないかと思うのです。兎に角「水と安全はただ」と思っていると言われた国民ですから。何故「安全はただ」と思うようになったか。その歴史的な探索から始めたいものです。中谷内も上に紹介した本なかで、信頼をえる方法のなかで相手と同じ価値共有していると感じると、その相手を信用するようになる、という主要価値類似性モデルを紹介し、強調しています（p. 195-196）。また、このことは古く中国の古典韓非子「説難第十二」にも、“何といっても人に意見を述べることの難しさは、話す相手の心を知り自分の意見をそこに上手くあてがうことが難しいという点にある。”と書かれている由です（飯田泰之：ダメな議論 ちくま新書 p. 023-025）。

放談ということで、大分くどくどと口が滑ったようです。ご勘弁ください。

2. From the President(会長からのメッセージ)

2006年度最終回のニューズレターとなりました。今年度は、例年のおおりに6月に東京大学山上会館にて春期シンポジウムと総会をおこない、11月には産業技術総合研究所(筑波)にて秋期研究発表会を開催しました。どちらも盛会で特に秋期研究発表会には2日間の会期に収まりきれなくなりそうなほど多くの発表がありました。

日本リスク研究学会は、1988年に設立し来年度には春期シンポジウムと秋期研究発表会とともに第20回を数えることとなります。第20回春期シンポジウムは6月22日に、第20回秋期研究発表会は11月17・18日に徳島大学にて開催の予定です。また、会員数は昨年末の段階で620名を越え現在も着実な増加の傾向にあります。

このような状況に対応するために、常任理事会の設置、事務業務の一部を外部委託、学会誌編集業務の改善など学会運営の効率化に鋭意努めています。しかしながら、拡大傾向にあるとはいえ、本学会は未だ会員数千名に満たない中規模の学会であり運営の多くを会員のボランティアに頼らなければなりません。多忙のなかボランティアで学会運営のために献身的に活動していただいている会員諸氏には改めて厚く御礼を申し上げます。

学会運営には、まだまだ不備な改善すべき点、改善がなかなか進まない点が山積していますが、会員の皆様にはどうぞご寛容下さいまして一層のご助力をたまわりますようお願いを申し上げます。

2007年2月

会長 土田昭司

3. 第19回秋期研究発表会(つくば, 2006年11月)

第19回秋期研究発表会が2006年11月11~12日に、(独)産業技術総合研究所のつくば中央第一・共用講堂にて開催されました。初日は若干の雨が残ったものの、翌日の日曜日は、写真のおおりに、秋晴れの良い



天気で、共用講堂に隣接するサイエンス・スクエアにも、周辺の一般の方々が多数、来所されていました。

参加できなかった会員の方々に、雰囲気だけでもお知らせしようと思い、実行委員長である東海先生をはじめ、その他に二名の理事の方々に同発表会の所感についてお伺いしましたので、以下に紹介致します。

近 本

第 19 回秋期研究発表会

実行委員長 東海明宏

第 19 回秋期研究発表会は、「リスク評価に基づく意思決定支援研究の展開」というテーマで開催されました。ご承知のようにつくば市には、高等教育機関、国立研究所、独法研究所、企業の研究所が数多く立地しており、日本のシンクタンクの集積場であることを意識し、決めたものでした。特に今回は、実行委員各位にそれぞれ、実務ワークをシェアさせていただき、企画、準備作業等を担っていただき開催にこぎつけるというスタイルをとりました。また当日には、つくばコンベンションビューローよりボランティアスタッフによる支援も受けました。この開催主旨において、早稲田大学教授村山先生には、展望講演として「リスク管理と社会変動」という題名で、ここ 20 年来の日本のリスク研究の来し方行く末をご自身のご研究の展開と重ねて講演いただき、多くの点で触発をうけた次第です。とりわけ、専門の看板に拘らずに、目の前の問題を如何に解決するか、という視点のご研究の展開がリスク研究の軸であることを再度認識次第です。続く、パネルディスカッションとして、基礎研究と問題解決支援の両方のお立場で仕事をされてきた方々 4 名による、本テーマに関連する話題で討論を行いました。独法の研究機関から與語先生（農業環境技術研究所、長坂先生（防災科学技術研究所）、大学から、前田（静岡大学）、村山（早稲田大学）の 4 名の先生方から、それぞれ、追及されてきた課題に関し、基礎研究、技術開発の展開、現実への波及という視点でディスカッションをおこないました。フロアとの議論においては、あるときは、枠組みに関するレベルの論点、またあるときは、個別の専門的な問題へと、一見まとまりにかけものではありませんでしたが、4 つの分野でそれぞれの意思決定の問題、それに必要な技術、それをささえる基礎研究が、それぞれどのような位相にあるか、相互に触発をうけ展開していく道筋はどうか、など結果としてリスク評価・管理を社会のシステムとして根付かせるには、という視点を深めるきっかけとしてうけとめていただければ、と存じます。2 日間の参加者は、のべ 186 名、発表件数は 100 件でありました。この場を借りて、ご参加くださったすべての方々、そして労をおとりいただいた実行委員会のメンバーに御礼を申し上げます。

日本リスク研究学会第19回秋期研究発表会

学会賞受賞者講演

環境情報科学センター 間正理恵

学会賞 一 岡田 憲夫 氏 （京都大学防災研究所教授）

奨励賞 一 広田 すみれ氏 （武蔵工業大学環境情報学部）

日本リスク研究学会、学会賞・奨励賞は理事からの推薦を表彰委員会（委員長： 酒井 泰弘 理事）において検討し、候補を選定。理事会の承認により決定されます。

例年は、学会賞・奨励賞の授与式は懇親会のはじめに行われてきましたが、2006 年度第 19 回秋期研究発表会においては、学会第一日目の午後、全てのセッションが終了したのち、参加者が一堂に会するなか、両賞の授与式が講堂で実施されました。懇親会は、その後、食堂に場所を移しての集まりとなりました。

同じくはじめての試みでしたが、学会賞受賞者による講演が行われ、受賞者にとっても、また参加者一同

にとってもきわめて意義深い時間となりました。

次回以降も、受賞者講演が行われるためには、学会賞受賞者が講演準備をするのに十分な時間的余裕を残しての早期（遅くとも夏頃まで？）の候補者の決定と理事会における承認が必要だろうと思われます。表彰委員会のみなさまのご健闘に期待いたします。

学会賞・奨励賞授与式 2006年11月11日 17:00～17:15

学会賞受賞者講演 岡田憲夫氏 同 17:15～17:50

岡田氏の講演内容については日本リスク研究学会誌 17(1)に「防災の参照軸としてのリスクマネジメントと両者の相互研鑽」として掲載予定です。

2006年度第19回秋期研究発表会に参加して

帝塚山大学 中谷内一也

2006年度の秋期研究発表会は、つくば市内の産業技術総合研究所において開催された。まずは、東海明宏先生を始めとする実行委員の皆さまにお礼を申し上げたい。

私は同研究所つくばセンターに足を踏み入れたのははじめてであり、規模の大きさや研究所としてのたまたまに圧倒されながら、発表会に通った。

さて、研究会の内容についての所感であるが、何といっても年々発表件数が増えていることに感心する。私をはじめ参加した15年前の論文集を調べてみると、発表件数は20件であり、今年度のそれはほぼ100件である。およそ5倍という慶賀すべき成長ぶりだ。ただ、多様性という本学会の特性を考えると、発表件数の増加が学会参加の面白さに線形に対応するかというと、そうでもないところが難しい。なぜなら、発表件数が増え、特定領域の発表で各セッションが構成されると、どうしても自分の専門領域のセッションに足が向いてしまうからである。これでは、せっかく多様な専門家が「リスク」というキーワードにリンクして集う本学会の旨味が味わいにくくなってしまう。私の場合であれば、最近では、リスク認知やリスクコミュニケーション、せいぜい頑張っただけで経済分析のセッションに“遠征”するくらい、という状況になってしまった。きまぐれに、化学物質のリスク評価のセッションに紛れ込んだりすることもあるのだけれども、たいていの場合、ちんぷんかんぷんのまま会場を後にすることになる。一方、発表する立場としても、たとえばリスク認知の研究者ばかりが発表者としてかためられているセッションでは、つい、社会心理学の基礎知識を前提として話を構成してしまう。以前の小規模発表会であった頃なら、発表会場は単独で、発表タイトルも、リスク評価や経済分析、リスクコミュニケーションなどが混在するごった煮状態だった。他会場という逃げ場があるわけでもなく、その分、発表者は他分野の聴衆を意識してプレゼンテーションを構成していたように思う。実際、私がリスク認知のことを研究するようになったきっかけの一つは、公衆衛生学やリスク評価の専門家のリスク論を聴いて（そのときは理解できた！）、「これは心理学からアプローチする価値がある問題だ」という気になったからであった。

別に、ノスタルジーに浸って、昔はよかったなどというつもりはない。ただ、自分の主専攻の学会に参加するのは違っていて、リスク学会に参加するというのは、リスクという難儀な、けれども魅力的な材料に対して、さまざまな分野の専門家がどんなふう挑んでいるのかを理解し、できれば自分の研究のヒントにしたいという“下心”があるからではないだろうか。学会が盛会になればなるほど、その下心に応える工夫が必要になってきているように感じる。

4. 米国 SRA の訪問記

米国リスク研究学会(Society for Risk Analysis)2006 年會出張報告

徳島大学総合科学部教授 関澤 純

昨年 12 月の SRA 年會（ボルチモア）に内閣府食品安全委員会の依頼により参加した。第 2 回リスク研究国際會議準備の打ち合わせがあり第 2 回世界會議は 2008 年 6 月にメキシコで開催されるが、日本リスク研究学会は企画や報告書の編集に協力し、東アジアのリスク研究ネットワークからセッションを企画する可能性を、土田会長の依頼により提案し了承された。優秀ポスター発表を前田恭伸理事が、旅費支援発表賞を京都大学中山亜紀さんが受賞されたことは喜ばしい。基調講演で Slovic 氏は小児の困難な手術成功のニュースは関心を呼ぶが、現在も世界各地で起きている genocide は他所のこととして心を強く動かさない問題を情緒的判断と論理的判断によるリスク認知の違いから説明し、このことを踏まえた対応の必要性を指摘した。別の基調講演では映画「The day after tomorrow」以来米国人の 90%は地球温暖化問題を理解し 75%は対応が必要と回答したが 39%は「危険性が明確化してから対応すれば良い」を支持し目に見えない地球温暖化リスク理解の困難さが指摘された。食品安全関連セッションでは、New York Times 報道以来魚をあまり食べない米国民が魚中のメチル水銀摂取リスクを深刻に考え魚食メリットとの関係でコミュニケーションに困難ありとの発表が多くなされた一方、昨年同様に日本以外からの食品經由 BSE 感染リスク関連の研究発表はなく、リスク認知と報道の内容および頻度、食生活習慣や社会・文化的な背景の関係が推定され、このことを考慮した国内外の食品安全のリスクコミュニケーション展開の必要が考えられた。

5. 事務局だより

5.1 日本リスク研究学会誌への投稿規程が変更されています。

日本リスク研究学会誌にご投稿下さい。ご投稿の際は新しい投稿規程（「日本リスク研究学会誌」17(1)p.140～）をご参照下さい。

5.2 学会事務局の窓口業務について

先の総会における取り決めにしたがい、2006年9月より、学会事務局の業務のうち主に窓口業務を大阪大学生活協同組合に委託しています。

住所・連絡先の変更、会員種別変更、入会などの事務的な連絡は、下記の「事務局係」にお願いいたします。

日本リスク研究学会「事務局係」

大阪大学生活協同組合 事業企画室内（担当：川畑）

住所：〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-9

E-mail : office@sra-japan.jp 電話 : 06-6841-2101 Fax : 06-6841-1938

5.3 学会のメールアドレスとホームページURLについて

学会では、従来、メールアドレスは関西大学のサーバ、ホームページは静岡大学のサーバを使用させていただくことにより運用してきました。このたび、サーバ管理の一元化により会員サービスの向上を図るため、商用サーバと契約してドメイン名も取得しました。

電子メールアドレス：事務局(係) office@sra-japan.jp
編集委員会 editor@sra-japan.jp（日本リスク研究学会誌）
editor-jrr@sra-japan.jp（Journal of Risk Research）
ホームページURL： <http://www.sra-japan.jp/>

5.4 2007年度からの会費について

2007年度から会費は、日本リスク研究学会誌のみ購読会費（一誌購読）と、日本リスク研究学会誌・Journal of Risk Research 購読会費（二誌購読）の2種になります。今年度 Journal of Risk Research を購読されている会員は来年度以降二誌購読として登録いたします。

一誌購読の方もこれを機会に二誌購読していただきますようお願いいたします。会費についてのお問い合わせ、お申し込みは上記「事務局係」までお願いいたします。

	入会金	年会費(日本リスク研究学会誌とJRR購読)	年会費(日本リスク研究学会誌のみ購読)
正会員	¥3,000	¥12,000	¥6,000
学生会員	無料	¥9,000	¥4,000
賛助会員	¥10,000	¥50,000	¥50,000
名誉会員	無料	無料	無料
購読会員	¥3,000	¥13,000	¥6,000

JRR: Journal of Risk Research

5.5 日本リスク研究学会共催・協賛イベント一覧（予定）

- 1) イベント開催日：2007年4月24日（火）、4月25日（水）

共催・協賛の別：共催

主催：日本学術会議土木工学・建築学委員会

イベント名：第21回環境工学連合講演会

連絡先：社団法人 日本機械学会 事務局 宮原

Tel : 03-5360-3505 Fax : 03-5360-3509 E-mail : miyahara@jsme.or.jp

2) イベント開催日：2007年7月19日（木）、7月20日（金）

共催・協賛の別：協賛

主催：社団法人 日本機械学会

イベント名：第17回環境工学総合シンポジウム 2007

連絡先：社団法人 日本機械学会 事業運営部門 総合企画グループ 宮原ふみ子

Tel : 03-5360-3505 Fax : 03-5360-3509 E-mail : miyahara@jsme.or.jp

3) イベント開催日：2007年9月25日（火）、9月26日（水）

共催・協賛の別：共催

主催：Risk Analysis Council of China Association for Disaster Prevention

イベント名：The First International Conference on Risk Analysis and Crisis Response (RACR-07)

会場：Shanghai Maritime University (Shanghai, China)

連絡先： Prof. Dr. Jiali Feng (Shanghai Maritime University)

Web site: http://racr.shmtu.edu.cn/en_index.asp

E-mail: RACR07@163.com

6. その他(2007年第20回秋期研究発表会開催案内)

2007年度秋期研究発表会は11月に徳島で開催です!

徳島大学総合科学部 関澤 純

2007年度秋期研究発表会を徳島大学で開催することになり、以下の日程を予定しています。多くの方には遠隔地となりますが、第20回記念として特色を持たせた企画やイベントを工夫し、交通の便と観光?のご案内もして多くの方においでいただきたく思います。残念ながら徳島大学には会員は関澤以外にいないので、鳴門教育大学の青葉暢子先生、神戸大学で以前研究発表会開催をご担当された高尾厚先生のほか、会員外の方のご協力も仰ぎ準備を進めています。会員の皆様からは、第20回記念企画のアイディアご提供など、ご支援とご協力をお願いします。

開催日時： 2007年11月17日（土）18日（日）

開催場所： 徳島大学工学部共通講義棟を予定

7. 編集後記

広報委員長の近本です。ニューズレターの発行など、当学会の活動を広く、一般に知らせることを目的に広報委員会が設置され、その初代委員長を仰せつかりました。広報ツールの主な手段には、ニューズレターとホームページがあります。ホームページは能動的に見に行かないと情報は得られませんが、ニューズレターは、受身の状態で情報が自動的にやってくるツールです。

広報委員長になって、まず思ったのは、このニューズレターを何とか充実させたいということでした。自動的にやってくる情報が魅力的であれば、学会全体の活性にもつながるだろうと考えました。事務的な通知だけではなく、知って得をするようなリスク情報や皆さんに役立つような情報を盛り込めないものか、考えた挙句に、毎回、巻頭トピックスとして、経験豊富で知識豊かな先生方にリスク研究に関する熱い想いを放談してもらうことにしました。第1回目は、皆さまご存知の京都大学名誉教授の菅原先生にお願い致しました。

また、広報委員会と同時に設置された国際・渉外委員会（土田会長が委員長を兼任）との連携も密にしながら、国際的な情報についても会員の皆様にお知らせしたいと考えています。将来的には「会員コーナー」なるものを設け、会員の皆様からのリスク研究に関する情報や熱い想いも紹介していきたいと考えています。

もう一つのツールであるホームページもリニューアルしているところです。所属している会員みんなが当学会を盛り上げていきたいと思っております。ますますのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

広報委員長 近本一彦

日本リスク研究学会誌

第17巻 第1号 (2007年3月)

目 次

【追悼 兜 眞徳 先生】	
編集委員会	1
「環境疫学と学際的リスク研究」の先駆者 - 兜 眞徳 氏を悼む	池田 三郎 3
兜 眞徳君を偲んで	遠山 千春 5
【特集1】 第19回研究発表会「リスク評価に基づく意思決定支援研究の展開」	
学会賞受賞記念	
防災の参照軸としてのリスクマネジメントと両者の相互研鑽	岡田 憲夫 7
特別セッション	
リスク管理と社会変動	村山 武彦 15
企画セッション リスクとメディア1	
原子力情報とマス・メディア：リスクに対する怒り	海援 宗男 21
企画セッション リスクとメディア2	
風評被害における報道・情報への接触とリスク認知	伊藤 誠 31
企画セッション リスクとメディア3	
リスク源としてのマスメディア-広告の悪影響とその対策-	掛谷 英紀 39
企画セッション リスクとメディア4	
マスメディアの悪意に対抗する技術	典谷 政宏, 徳田 典子, 掛谷 英紀 45
【特集2】 第19回春期講演シンポジウム	
「化学物質による内分泌かく乱作用のメカニズム-健康影響の観点から」	岡正 理恵 53
シンポジウム講演(1)	
化学物質の内分泌かく乱作用と各国の取組の現状	岡正 理恵 55
シンポジウム講演(2)	
化学物質による内分泌かく乱の幾つかのメカニズムについて	井口 泰泉 61
シンポジウム講演(3)	
血中PCB濃度を指標とした日本人の環境化学物質曝露	深田 秀樹, 森 千里 65
シンポジウム講演(4)	
内分泌かく乱に関する疫学的・実験的研究の最近の動向	遠山 千春 71
シンポジウム講演(5)	
内分泌かく乱化学物質による低用量影響の蓋然性	関澤 純 79
【研究論文】	
わが国が経験した食品の安全性に関連する諸事例の社会的関心度合いの比較	西尾 健, 佐藤 京子 85
国内事例に基づく意思決定プロセスにおけるステークホルダー関与の設計に関する考察	神田 玲子, 辻 さつき, 土居 雅広 95
新興感染症発生時のマスコミ報道に関する研究	
-新聞記者を対象としたグループインタビューによる検討-	岸川 洋紀, 村山留美子, 内山 眞雄 105
交通安全に関わる組織への社会的信頼とその構造	高木 彩, 山崎 瑞紀, 池田 謙一, 堀井 秀之 115
【寄稿論文】	
On Weather Derivatives and Temperature Swapping in Japan	Atsushi TAKAO 123
高病原性鳥インフルエンザに関する不安喚起モデルの妥当性の検討	山崎 瑞紀, 吉川 墨子 129
事務局だより	137

日本リスク研究学会



The Society for Risk Analysis
Japan